

現状と課題（A欄）

（現基本構想の進捗検証・評価）

【空き家】	空き家が増加しており、土地が動いていない印象がある。
【交通】	区は、南北の交通が円滑ではない。
【協働】	まちづくりにおける協働取組が、行政の下請け的な印象がある。

（今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点）

【全体】	不燃化が進むと、構造上リフォームや増改築が困難となり、居住スタイルの変化に伴う住宅ニーズと乖離したことによる転居が発生する。
【空き家】	今後、空き家や空き地が増えていく場合、計画的な「歩きたくなるまちづくり」が困難となる。
【交通】	働き方改革・リモートワーク・デリバリーシステムの発達等、今後10年で手段としての移動から、移動すること自体が目的化する。 今後10年で、一般道における自動運転の実現は難しい。新しい交通体系として基本構想に描くのは困難。

目指すべきまちの姿（B欄）

（目指すべきまちの姿）

①「魅力ある歩きたくなるまち」
②「新たな交流が生まれるまち」
③「安全・安心に住み続けられるまち」
④「住民主体の協働が進むまち」

（目指すべきまちの姿を設定した考え方など）

①	にぎわい創出・駅周辺を起点とした計画的な景観づくりを通じた移動することが楽しくなるまちづくり。
②	住宅都市杉並の価値をさらに高めるためには、公共交通と徒歩・自転車でのシームレスな移動サービスによる気軽に街に出掛けられることに加え、交流・消費・にぎわいのある複合的な拠点としての質を高め、街の活性化を図る必要がある。
③	公共企業等と連携した頑強なライフラインの構築、災害に強い家づくりを通じた安全・安心なまちづくり、多様なライフスタイルの変化にも対応して暮らしつづけられる柔軟なまちづくりを進める必要がある。
④	シェアリングエコノミーや住民合意によるルールづくりを通じた住民主体となったまちづくり。

「目指すべきまちの姿」に進んでいくための基本的な方向性など（C欄）

（基本的な取組の方向性）

（具体的な手段・方法、取組など）

①「魅力ある歩きたくなるまち」

SNS映えする、景観や観光の視点で景観計画の基本的な方向性を見直す。

歩きたくなるまちづくりを進めるためには、十分な歩行者空間確保などの回遊性の向上により、商店街の売り上げが上がる等の成功体験を作り、歩きたくなるまちづくりを進める。

移動の質が転換することを見据え、効率的に早く移動するだけでなく、楽しく歩けるまちづくりを進める。

隣接自治体と連携して、人の移動、人の流れを作るまちづくりを進める。

駅周辺のまちづくりは、人の流れの柱となる事業を誘導する。

駅周辺のまちづくりは、現在だけでなく、将来の利用の仕方を想定して面積や規模の拡大だけでなく、商業の活性化や障害者施策などと連携し、住宅都市及び地域交通の要となるようまちの質の向上を図る。

歩行者や自転車空間を十分確保することで商店街の売り上げを上げるような成功体験をつくる取組を実施する。」

他自治体で取り組んでいる「景観百選」といった、主要景観資源について、区民による人気投票を行う。

屋外広告物ワークショップによる屋外広告物デザインのルールづくりと意識啓蒙に取り組む。

荻窪周辺の商業ビルは老朽化しており、建替えを個々の開発に任せていると駅前が高層マンション化する恐れがある。社会人のリカレント、学びたい人は多いため、駅前への専門学校等の誘致など、人の流れを活かす工夫について検討。

②「新たな交流が生まれるまち」

住宅都市杉並の魅力や価値を活かす上で、10年後の移動・交流・流動の観点を踏まえる。

移動の「目的化」が進む事による、多彩な移動手段を確立する。

区南北交通を始めとする交通利便性の円滑化と向上に取り組む。

他の行政区域と連携した、人の移動、人の流れをつくるまちづくりを推進する。

交通に関して、今後は、移動が楽しくなるような質の向上(質の転換を含む)を推進する。特に駅周辺は地域交通の要となることから、重点的に駅前の整備を図る。

住宅系都市として、「どのような駅前」を作るか踏み込んで検討を進める。

鉄道と道路の立体交差化など地域公共交通の整備について、公営企業などとの連携を推進する。

交通弱者の生活確保や、環境保全のため、南北バス「すぎ丸」など現行バス路線や鉄道、バスなど複数の接続性を改良するMaaS、自動運転等の技術など最新の技術を見据えた、交通体系を構築する。

(交通に関して)他区との連携を進めるプロジェクトを立ち上げる。

シェアサイクルの利用拡大に向けた民間事業者への区有地無償貸与。

南北交通円滑のため、自転車専用道路の整備、すぎ丸の周遊。

交通事業者、住民利用者、道路管理者、交通管理者など利害関係者による協議会方式で策定する地域公共交通計画の策定。

車道を歩行者や自転車が通りやすくすることで商店街の売り上げを上げるような取組を実施する。

駅と周辺交通環境の整備は、対象地域ごとに変えるのではなくモデル地区を設定し、先駆的事例を作るような形で進めることを検討。

現状と課題（A欄）

（現基本構想の進捗検証・評価）

【空き家】	空き家が増加しており、土地が動いていない印象がある。
【交通】	区は、南北の交通が円滑ではない。
【協働】	まちづくりにおける協働取組が、行政の下請け的な印象がある。

（今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点）

【全体】	不燃化が進むと、構造上リフォームや増改築が困難となり、居住スタイルの変化に伴う住宅ニーズと乖離したことによる転居が発生する。
【空き家】	今後、空き家や空き地が増えていく場合、計画的な「歩きたくなるまちづくり」が困難となる。
【交通】	働き方改革・リモートワーク・デリバリーシステムの発達等、今後10年で手段としての移動から、移動すること自体が目的化する。 今後10年で、一般道における自動運転の実現は難しい。新しい交通体系として基本構想に描くのは困難。

目指すべきまちの姿（B欄）

（目指すべきまちの姿）

①「魅力ある歩きたくなるまち」
②「新たな交流が生まれるまち」
③「安全・安心に住み続けられるまち」
④「住民主体の協働が進むまち」

（目指すべきまちの姿を設定した考え方など）

①	にぎわい創出・駅周辺を起点とした計画的な景観づくりを通じた移動することが楽しくなるまちづくり。
②	住宅都市杉並の価値をさらに高めるためには、公共交通と徒歩・自転車でのシームレスな移動サービスによる気軽に街に出掛けられることに加え、交流・消費・にぎわいのある複合的な拠点としての質を高め、街の活性化を図る必要がある。
③	公共企業等と連携した頑強なライフラインの構築、災害に強い家づくりを通じた安全・安心なまちづくり、多様なライフスタイルの変化にも対応して暮らしつづけられる柔軟なまちづくりを進める必要がある。
④	シェアリングエコノミーや住民合意によるルールづくりを通じた住民主体となったまちづくり。

「目指すべきまちの姿」に進んでいくための 第1部会—資料32
基本的な方向性など（C欄）

（基本的な取組の方向性）

（具体的な手段・方法、取組など）

③「安全・安心に住み続けられるまち」

マンション・アパートのバリアフリー化を推進する。

災害に強い頑強なライフラインを整備する。

狭あい道路、商店街における無電柱化を推進する。

空き家発生の抑制を重点化する。

（災害に備え）屋根の強いまちづくりを進める。

ライフラインを提供する企業との協力体制を構築する。

空き家を災害時の仮設住宅として活用可能とするため、税制面を考慮した「登録空き家制度」を構築する。

車の一方通行化による自転車専用帯の整備。

自転車ネットワーク計画を検証する。

区民の安全な自転車走行のため、ナビラインの周知を徹底する。

④「住民主体の協働が進むまち」

官民が連携した取組を推進する。

福祉・出産・子育て等、区民生活の延長にある住民発案のまちづくりを進める。

他分野の専門家を自治体職員として採用する。

ICTを活用し、空きスペースや空き時間、個人が保有する技術をシェアする。